

浦里うら明あき為な後のち正ただ夢ゆめ卷まき之の十一じゅういち

第十九回

江戸

南なん仙せん笑わら林はやし楚そ満みち及およ
瀧たき亭てい鯉こい丈ぢやう 合あ作さく

爰こゝに又また彼かの浦里うらへ千葉家ちぢやけあり二見ふたみ十左じゅうさ五ごののが屋敷やしき
にありけり。が鬼角目おにかくめにさう風倍ふうばいにりりままて寝ね
果たまぎにあり。後のちバハ一旦ひとたまご花形村はながたむらの卒そつ治ちか方人かたひ預よんと。
蜜みつの轎こしと雇やとい送おくらんと。のりよ。浦里うらへままてぐくの



浦ウラハイお妻ウメいも母ハハでいもイモいもイモいもイモ

まのまの道ミチののまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

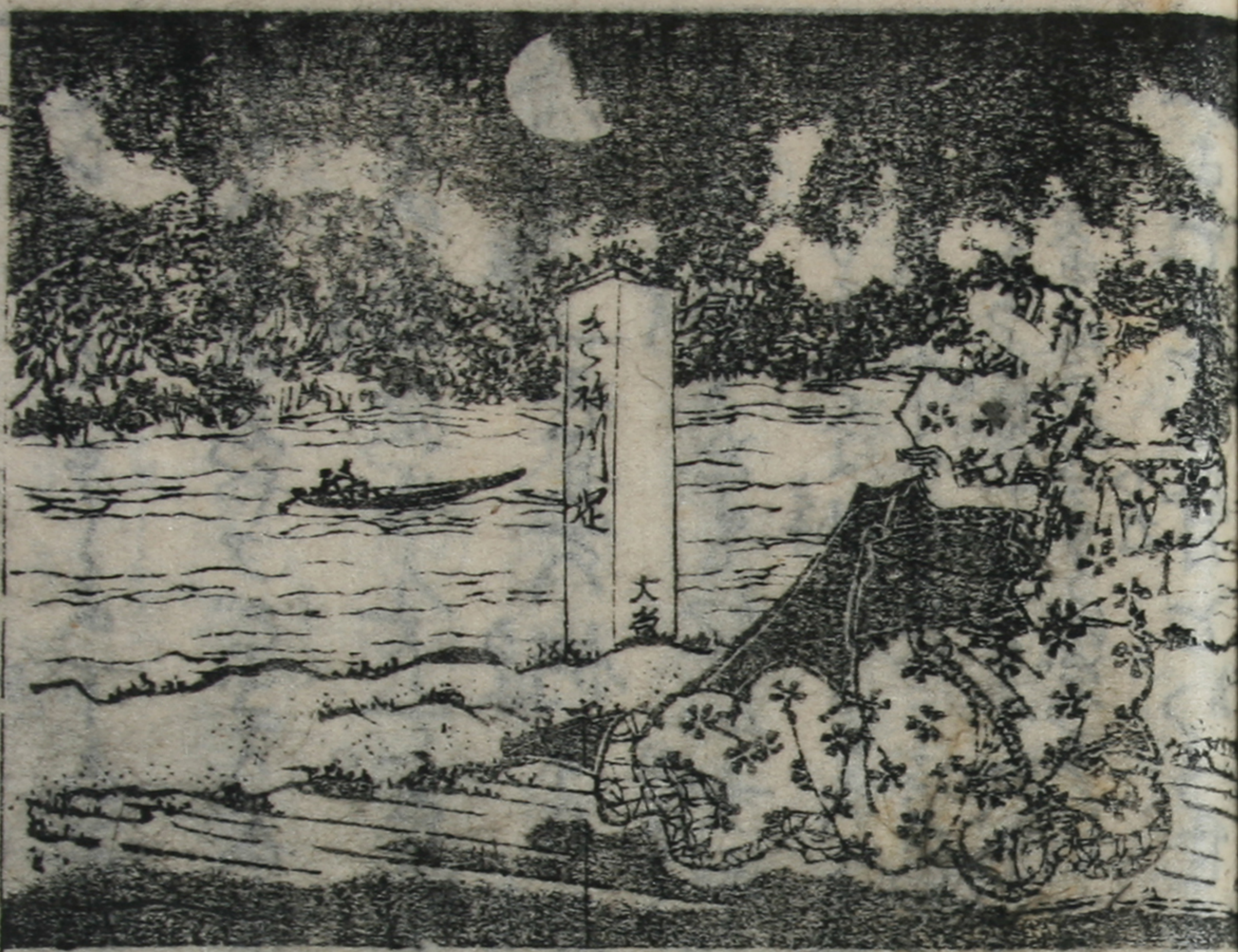
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの



ふらふらと行くと

引まゝとまゝと受おとす様の美

ひ中入を入うと今の着とさるの海中の美

見合とさる浦里浦ヤアあまの八あま見

を妙のさと

さるとのめと打けイヤサ

見まととさとの通とりかとの旅と

の者のをトおま前ま方ま女まとさとと

てとやふとのさとととはとまとと

せんとぎと象と

詮と也と何とハととともとあと且と比と一と件とハ

変々よりぬへりけりこもぬあはれいぢまぬさうくと

世話とやせ折角うましく法といひ荒川極入あること

あけぬ其屋敷とも欠落しこと変々いひさうと

に怪しむゆゑよ犬と云ひてさびしむまじき事なり

屋敷にうくまゆのあくよくとて上今日爰へ来るまで

まじき事なり。村の愚漢かゝらして

喧嘩をせしむ皆あはれ先くまとして作の狂言を

くまといひ此始末をいふは女を賣入んぬ事なり



あはれがあはれいさくら。サアうせかまじと荒げさくけあふとぞ走たせ

まろる。○川竹に一節足らぬ憂勤め仇し仇浪定あつらふまじ

あはれ身ハ婦多門に流しまじ藝云子づつとめの波昔とあつらふまじ

丈夫の名に呼ぶもよ。や世にころころさきや在昔ハあつらふまじ

山名屋の浦里が姉とかかたのよびるまて里の癖今ハあつらふまじ

自前の氣あきら一人の母ハ孝行とてまじくころるハあつらふまじ

女の千葉三筋の糸に朝夕の相も細きころをあつらふまじ

世帯。ころり文句の仇つきよ袖もく人ハ有るから。あつらふまじ

入てまおのてまおのてまおのてまおのて
入てまおのてまおのてまおのてまおのて

長「あつらふはけいふく」
長五郎ちんよくまおのて今も

ア子らあつらふて入てまおのてまおのてまおのて

お知るまおのて「波」もきえび間ちようへあつらふ

お前よまおのて「あ」まおのてまおのて「長」まおのて

とあつらふまおのて「あ」暑い水と「お」まおのて

「あ」まおのて「あ」まおのて「あ」まおのて「あ」まおのて

「あ」まおのて「あ」まおのて「あ」まおのて「あ」まおのて

くづいふてあしむ段々うちあはれて身の上のるの親の

夏こころのま嘯こころのまきよ付てもやし孝行うつくの女ちよあやとやうあやのゆよ

チツト時代いづの演説まうが末まのまあまのりるるる

うあつらんがあつちとちつてううあつちつてううあつちつて居る

あつちつてううあつちつて居るあつちつて居るあつちつて居る

二人暮くらたむらさくさくもの女房おんなばやにても持もつるうら

さつちつてううあつちつて居るあつちつて居るあつちつて居る

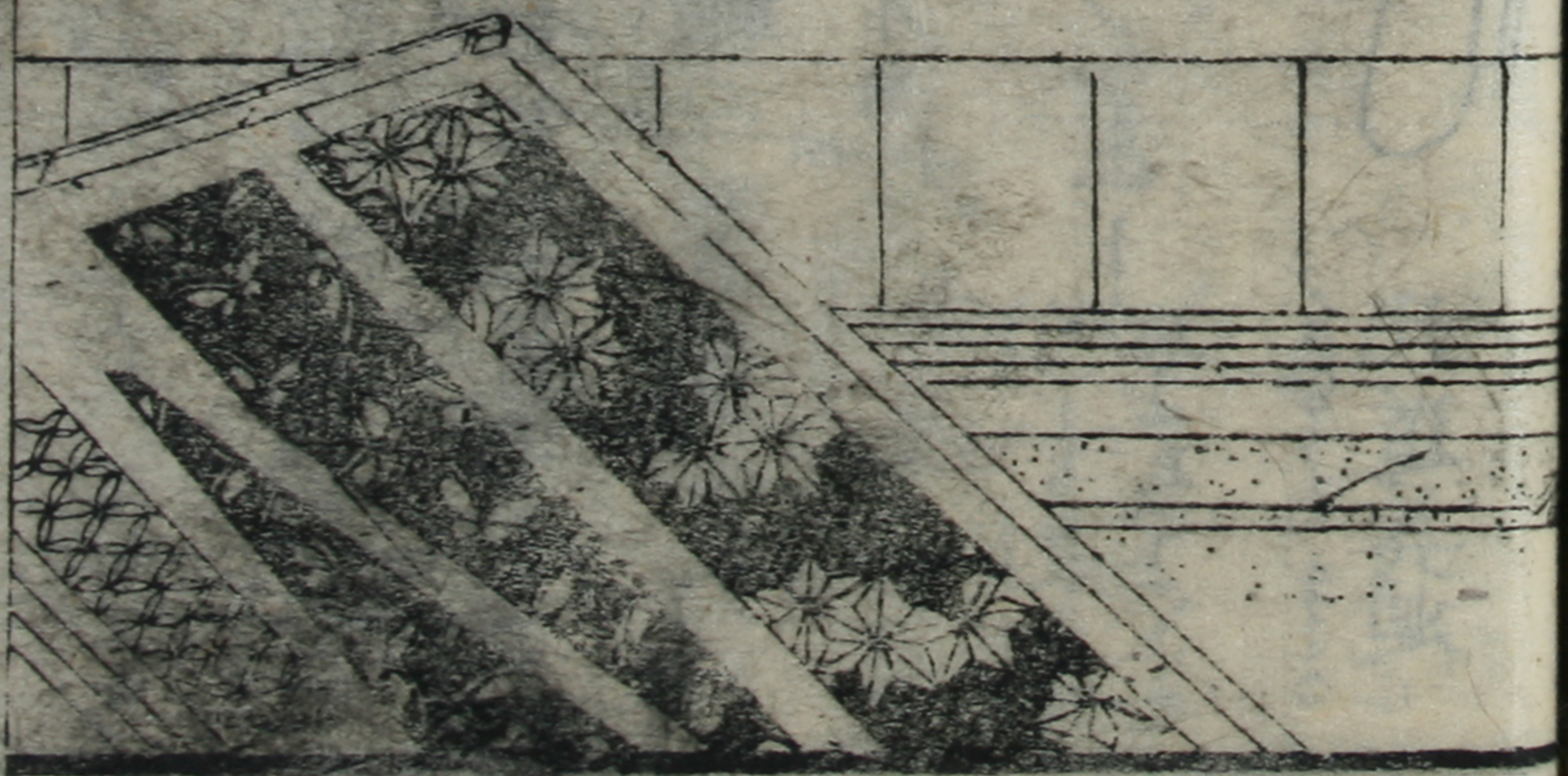
藝者げいの身みの上うへのりや座敷ざしきやむや酒さけよ不養生ふやうじやう

鏡六
魂を
うき

娘吉

清次





アイサ 知てういのの アイサ みるまおアアなるなる 知ら

ざよふらうら。こらちでも 猫むごてめちまごアア あま

がまへこころが根こまけ 知てらまきてこらみずんてい

あややア花街の山名屋の先この浦里さんうらさんの売うしろで

まじうとりのやこまらさこまじうら 近頃知こアア 浦里が

番新とてわや ころけが。ぢふひん 訳り近頃ころ

ちくまて養者まかにまや かが時ぐくら 若イ俵

氣野郎が。亭主ていしゅとしていふ 噂うわさいへばいひちやま

咳て全六 全一
横身と事

そまじでさる。なつともめ。その若い男

とりか内方のうへの蝶五郎。スリヤ時次郎め

もこの切アに。まやううんで居よ。今も志まぬに。

はあのごうう。お玉めがめりてぬく。且入波吉が

そまう。とみも合鳥が。行ぬと思ふ。ごうと春

日屋の全六とまう。アノ蝶五郎めがさく

金流りの菅家の一軸。うまくと。あつちく巻

あひふといふユそのごんぐ。コリヤあははららが計



めいご橋
銀六
余
おん

○其夜も既に更けつて人あづままよ〜又満

時ときのききせぬあづま 謎め代山橋やまはし ぎぎのに夫つまとまよ〜

見てみ 全ぜん六ろく 全ぜん 右みぎ 門かど さるる 全ぜん コこリりヤや 味あじふ

まら〜今夜こんやの狂言きやうげんシテまよ〜のささひら

全ぜん 全ぜん 全ぜん まら〜ちち 爰こゝにこゝももまよ〜むむ 懐なつかしう。

出で〜と見みせる間まもあらずせむせむ追おひひきき〜一人ひとり

の若わかめめのううくくと見みるるよよろろ 出で〜人ひととまよ〜。

裳ももととまよ〜入い〜ヤやアあ 見み女めととまよ〜。

こゝろで先へまゝの篠塚ぞぐと一言あひせこそ

まゝ者ハこの全六今日まであんなごとく思ふは代

七此世にさきつめまぐこそ迷舟橋の船の中

夢うろくうろまゑるうろく姿あはれも海是と思ふ

のハ正真正銘あつたうぬ^儀らうのよもま

我等がエのヨるにうま建河通ひころりさま

まゝ其時ハ店者の十露盤よろかりあひひ物

のろりまもあつらうろりうろりうろりうろり流浪して

ちつと腕うでに覺おぼ入いのぎ後ご七しちううまままままままままままままままま前まへ生なまの

おのおのままのの仇あだととああののままとと討う古こ今いまままままままままま敵あだううもも。

ううららままのの又また ううひひととままらら 全全一一ままぬぬららややアア返へらら

討うちちおお玉たまがが晴はろろととりりふふらら入い恋こいののいいももああらら死しぞぞとと

るるののめめ時とき次つぎ郎らうがが有あ家かももううぬぬがが知しててどどああらら早はやくく

ぬぬららししととああままああアアググまま 後後一一ままままままままままままままままのの一一軸じくとと

懐なつか入い手てとと機はたののここまままままままままま荒あ川か 全全六六左さ右みぎるる

ととくくんんででああまま入いとと切きここむむ刀やいばののここまままままままままままま飛と走はるるのの此こゝ方かた

